

序

上代日本の文獻に特殊な音假名があるように思われ、これまで二三の漢字についてその用法、用例等を具體例に即して調査説明してきた⁽¹⁾。その結果、たとえば日本書紀に用いられた「叱」「伐」「支」などの音假名は朝鮮系のものであらうと考えられるに至った。本稿では更に漢字「旱」「干」について上代の文獻を調査しつつ、この漢字の、特に日本書紀を中心とした音假名の用法等説明しておきたい。

一

上代日本の文獻には漢字「旱」「干」の使用は多いが、音假名として用いられているのは僅に五十數例である。その五十數例の中日本書紀に用いられているのは大部分を占める五十例である。こゝで書紀に用いられた音假名「旱」「干」の用例を示しておく。

(1) (二年) 一云御間城天皇之世。額有角人。乘一船泊于越國筭飯浦。故號其處曰角鹿也。問之曰。何國人也。對曰。意富加羅國王之子。名都怒我阿羅斯等。亦名曰于斯岐阿利叱智干岐。

(垂仁天皇紀)

(2) (冬十月) 爰新羅王波沙寐錦。即以微叱已知波珍干岐爲質。仍資金銀彩色及綾羅縑絹。載于八十艘船。令從官軍。是以新羅王常以八十船之調。貢于日本國。其是之緣也。

(神功皇后(攝政前紀))

(3) (十二月) 則皇后爲男束裝。征新羅。時神導之。由是隨船浪之遠及于新羅國中。於是新羅王宇流助富利智干。參迎跪之。

(神功皇后(攝政前紀))

(4) (五年春三月) 仍有返先質微叱許智伐旱之情。是以詔許智伐旱而給之曰。使者汗禮斯伐。毛麻利叱智等告臣曰。我王以坐

臣久不還而悉沒妻子爲俘。冀還本土。知虛實而請焉。皇太后則聽之。因以副葛城襲津彥而遣之。共對馬宿于鉦海水門。時新羅使者毛麻利叱智等。竊分船及水手。載微叱旱岐令逃于新羅。

(神功皇后紀)

(5) (四十六年) 於是。卓淳王末錦旱岐告斯摩宿禰曰。甲子年七月。百濟人久氏。彌州流。莫古。三人到於我土。

(神功皇后紀)

(6) (六十二年) 百濟記云。壬午年。新羅不奉貴國。貴國遣沙至比跪令討之。新羅人莊飭美女二人。迎誘於津。沙至比跪受其美女。反伐加羅國。加羅國王已本旱岐。及兒百久至。阿首至。國沙利。伊羅麻酒。爾汶至等。將其人民。來奔百濟。

(神功皇后紀)

(7) (二十三年) 夏四月壬午朔戊子。任那王已能末多干岐來朝。言已能末多干岐。……是月。遣使送已能末多干岐并詔下在任那近江毛野臣推問所奏。

(繼體紀)

(8) (二十三年) 由是。新羅改遣其上臣伊叱夫禮智干岐。新羅以上臣。一本云伊叱夫禮智干岐。來請聽勅。毛野臣遙見兵仗圍繞衆數千人。自熊川入任那已叱利城。伊叱夫禮智干岐次于多多羅原。不歸。侍三月。頻請聞勅。

(繼體紀)

(9) (二年四月) 安羅次干岐夷吞奚。大不孫。久取柔利。加羅上首位古殿奚。卒麻旱岐。散半奚旱岐兒。多羅下旱岐夷他。斯二岐旱岐兒。子他旱岐等。與任那日本府古備臣。往赴百濟俱聽詔書。百濟聖明王謂任那旱岐言。日本天皇所詔者。全以復建任那。今用何策起建任那。盡各盡忠奉展聖懷。任那旱岐等對曰。前再三廻與新羅議而無答報所圖之旨。更告新羅尙無所報。今宜俱遣使。往奏天皇。夫建任那者。爰在大王之意。祇承教旨。誰敢間言。然任那境接新羅。恐致卓淳等禍。

(欽明紀)

(10) (二年四月) 聖明王曰。昔我先祖速古王。貴首王之世。安羅。加

羅。卓淳旱岐等。初遣使相通。厚結親好。以爲子弟。冀可恆隆。

(欽明紀)

(11) (二年七月) 謂任那曰。昔我先祖速古王。貴首王。與故旱岐。始約和親。式爲兄弟。於是我以汝爲子弟。汝以我爲父兄。共事天皇。俱距強敵。安國全我至今日。言念先祖與舊旱岐。和親之詞。有如皎日。自茲以降。勤修隣好。遂敦與國。恩踰骨肉。善始有終。寡人之所恆願。

(欽明紀)

(12) (四年十二月) 同議曰。臣等稟性愚闇。都無智略。詔建任那。早須奉勅。今宜召任那執事。國旱岐等。俱謀同計。抗表述志。又河內直移那斯。麻都等猶住安羅。任那恐難建之。故亦并表乞移本處也。

(欽明紀)

(13) (五年二月) 百濟遣施德馬武。施德高分屋。施德斯那奴次酒等。使于任那。謂日本府與任那旱岐等。

(欽明紀)

(14) (五年二月) 今欲請留津守連。別以疾使。具申情狀。遣奏天皇。當以三月十日發遣使於日本。此使便到。天皇必須問汝。汝日本府卿。任那旱岐等。各宜發使共我使人。住聽天皇所宜之詔。

(欽明紀)

(15) (五年二月) 百濟本記云。汝先那干陀甲背。加臘直岐甲背。亦云。那哥陀甲背。鷹哥岐彌。語訛未詳。

(欽明紀)

(16) (五年二月) 又謂日本府卿。任那旱岐等。

(17) (五年二月) 於是任那旱岐等曰。由使來召。便欲往參。日本府卿不肯發遣。故不性焉。大王爲建任那。觸情曉示。親茲忻喜。難可具甲。

(欽明紀)

(18) (五年三月) 的臣等住來羅非朕心也。曩者。印支彌與阿鹵旱岐。在時。爲新羅所逼。而不得耕種。百濟路迥。不能救急。由的臣等往來新羅。方得耕種。朕所曾聞。若已建任那。移那斯。麻都。自然却退。豈足云乎。

(欽明紀)

(19) (五年三月) 夫喙國之滅。匪由他也。喙國之國破旱岐。貳心加羅國。而內應新羅。自外合戰。由是添焉。若使國破旱岐不爲內應。喙國雖小。未必亡也。至於卓淳。亦復然之。假使卓淳國主不爲內應新羅。招寇。豈至滅乎。

(欽明紀)

(20) (五年十一月) 百濟遣使召日本府卿。任那執事曰。遣朝天皇。奈率得文。許勢奈率哥麻。物部奈率哥非等還自日本。今日日本府臣及任那國執事。宜來聽勅同議任那。日本吉備臣。安羅下旱岐。大不孫。久取柔利。加羅上首位古殿奚。卒麻君。斯二岐君。散半奚君兒。多羅二首位訖乾智。子他旱岐。久嵯旱岐。仍赴百濟。於是百濟王聖明略以詔書示曰。吾遣奈率彌麻佐。奈率己連。奈率用哥多等。朝於日本。詔曰。早建任那。又津守連奉勅問成任那。故遣召之。當復何如能建任那。請各陳謀。吉備臣。任那旱岐等曰。夫建任那國。唯在大王。欲冀遵王。俱奏聽勅。

(欽明紀)

(21) (五年十一月) 宜與日本臣。任那旱岐等。俱奉遣使。同奏天皇。乞聽恩詔。於是吉備臣。旱岐等曰。大王所述三策。亦協愚情而已。今願歸以敬諮日本大臣。安羅王。加羅王。俱遣使同奏天皇。此誠千載一會之期。可不深思而熟計歟。

(欽明紀)

(22) (六年九月) 百濟遣中部護德菩提等。使于任那。贈吳財於日本府臣及諸旱岐。各有差。

(欽明紀)

(23) (十一年四月) 百濟遣中部奈率皮久斤。下部施德灼干那等。獻獬廌十口。

(欽明紀)

(24) (十五年十二月) 百濟遣下部杆率汶斯干奴上表曰。百濟王臣明及在安羅諸倭臣等。任那諸國干岐等奏。

(欽明紀)

(25) (廿二年) 新羅遣久禮叱及伐干貢調賦。司賓饗遇禮數減常。及伐干忿恨而罷。

(欽明紀)

(26) (十二年十月) 於是百濟國主怖畏天朝不敢違勅。奉遣以日

羅^二。恩率德爾。餘怒。哥奴知。參官。梅師德率次干德。水手等若干人。日羅等行^二到吉備兒嶋屯倉^一。

(敏達紀)

(27) (七年七月) 中臣内使^二沙門法辨。秦筆。賜^二新羅上臣大角千度信船一雙^一。付^二東嚴等^一。

(天智紀)

(28) (二年六月) 新羅遣^二韓阿浪金承元。阿浪金祇山。大舍霜雪等^一。賀^二騰極^一。并遣^二吉浪金薩儒。韓奈末金池山等^一。弔^二先皇喪^一。其送使^二貴干寶眞毛送^一承元。薩儒於筑紫^一。

(天武紀)

(29) (二年六月) 饗^二貴干寶等^一於筑紫。賜^二祿各有^一差。即從^二筑紫返^一于國^一。

(天武紀)

(30) (二年八月) 高麗遣^二上部位頭大兄邯子。前部大兄碩干等^一朝貢。仍新羅遣^二韓奈末金利益^一送^二高麗使人于筑紫^一。

(天武紀)

(31) (四年三月) 高麗遣^二大兄富干。大兄多武等^一朝貢。新羅遣^二級食朴勤脩。大奈末金美賀^一進^レ調。

(天武紀)

日本書紀の「干」「旱」の用例は右の通りであるが、左の文獻をも調査していることを記しておく。

日本古典文學大系本によつて

古事記、萬葉集、出雲風土記・常陸風土記・播磨風土記・豊後風土記・肥前風土記ならびに逸文、祝詞、懷風藻、文華秀麗集

國史大系本によつて

先代舊事本紀、神道五部書、續日本紀、

群書類聚本によつて

東大寺金銅碑文、上宮聖德法王帝説、東大寺奴婢籍帳、新撰姓氏錄、

寧樂遺文、平安遺文(初期のもの)、正倉院編年文書(大日本古文書)、

金石文(大矢透著「假名源流考」によつて)

宣命、

朝鮮の文獻としては

三國史記、三國遺事、金石文

二

用例(15)の「那干陀」は日本書紀に引用された百濟本記に見える人名である。日本古典文學大系には「那奇陀甲背」と同人物か。顯宗三年是歲條にみえる任那魯那奇他甲背も同一人で左魯麻都の先祖であろうか(2)との頭注が付けられているが、果して「那干陀」なる人物が顯宗三年紀の「那奇他(3)」と同一人物であるかは現在のところ容易に斷定し難いようにも思える。しかし、もし關連を求めて同一人物を求めるならば欽明五年紀(用例(15))の書紀に引用された百濟本記の「亦云那哥陀甲背。鷹哥岐彌(4)」の記録を参照するのが適切であろう。ところで國史大系本の欽明紀に見える漢字「哥」のすべてに、寫本間に文字の異同が見えているが、日本古典文學大系では「哥」を「奇」と校訂し、その理由として「奇は上古音でガにあたる文字で、わが推古朝遺文にもガにあてた例があり、欽明紀にみえる朝鮮史料には用例が多い。哥は、奇がキの假名に使われるようになってガと訓むことが分らなくなり、哥の字と誤解して改めたものであらう(5)」との見解を示している。従うべき意見と思われ、「那干陀」の「干」の音價推定にも「那奇陀」の「奇」との對比の上で考察を進めていくことにする。

「奇」は韻鏡によれば「内轉、第四開合、牙音、濁、三等、支韻」であるので、主母音「ie」が一應推定はされるが、「干」との連關の上では「a」の主母音が想定されなければ不自然のように思われる。ところで、その多くが朝鮮系歸化人の手によってなったといわれる我が國推古朝遺文に、漢字「奇」が「ガ」の音假名として用いられていることは日本古典文學大系の注をまつまでもなく周知の事實であるが、朝鮮人の手になった古文獻百濟本記に漢字「奇」が「ガ」の音價をもつ音假名として用いられていることは、日本書紀の朝鮮關係資料

の整理者・筆録者の推定を試みる場合に極めて示唆に富む興味ある事象であると考えられる。

「干」は韻鏡によれば「外轉第二十三開、牙音、清、一等、寒韻」とされているので「カン」と一般に發音されるが、大漢和辭典に引かれた集韻に「候肝切」「魚肝切」とあって「ガン」の發音も見えている。漢字「奇」が「ガ」の音を表記していたことをも考え合わせ「干」の頭子音は或いは濁音系のものとして用いられたとも想像される。用例(19)の「干」の韻尾「n」は取捨されていたものと考えてよく、「那干陀」は「ナガダ」と發音された語の表記と考えられる。

用例(23)に見える「施德灼干那」、用例(24)に見える「杆率汶斯干奴」、用例(26)に見える「德率次干德」の「施德」「杆率」「德率」はそれぞれ百濟國の八等、五等、四等を表わす官位名⁽⁶⁾で、日本書紀には古朝鮮で用いられたと思われる字面の漢字使用が見られる。恐らく書紀編集時に、日本に持ち込まれていた朝鮮資料の文字をそのまま、轉寫筆録したものであろう。

「灼干那」についての考察には、「灼干那」に似た表記、繼體十五年紀の「灼莫古」を参照してみたい。「灼莫古」は百濟國の將軍の名であるが、他に「莫古」のみ單獨で用いられた例が書紀にあることから推して「灼」と「莫古」とに分析し、「灼」は「百濟の複姓」と考えられるように思える。であれば「灼干那」も「灼」と「干那」に分析出来るように思われる。

「汶斯干奴」については欽明紀に見える「德率汶休麻那」「固德汶休帶山⁽⁷⁾」の表記を参照したい。日本古典文學大系によれば「汶休」は百濟の複姓⁽⁸⁾との注が付せられており、「汶休」と「麻那」・「帶山」に分析が可能である。音相の近い點から何らかの手がかりを求めらるなら「汶斯干奴」も「汶斯」と「干奴」に分析することが或いは可

能ではないかと思われる。

「次干德」については、欽明紀の「施德次酒」を参考にして考察しておきたい。「施德」が百濟の八等官であることは既に述べていることであるが、もし「次酒」が「次」と「酒」とに分析可能であるならば、「次干德」の「次」と關連づけられるように思われ、「次」は「百濟の姓」と考えることも可能であろう。

百濟人名として「干那」「干奴」「干德」を想定してみたが、數多くの問題が未解決のまま残されており、今後の研究に待たなければならぬ。が、ともあれ、漢字「干」は人名の表記に用いられた音假名であることだけは間違いない。更に「官位・姓・名」の表記順序は百濟國で習慣的に用いられた一定の表現形式と考えられる。書紀に用いられた漢字は朝鮮資料に記されていたままのものと考えられ、書紀編集時に朝鮮資料が轉寫されたものと思われる。

用例(30)、(31)に見える「碩干⁽⁹⁾」「富干⁽⁹⁾」は使者として來朝した高麗人名である。用例(28)、(29)に見える「貴干」は新羅國の外位で「外位別稱官名、其位視^ニ京位^ニ獄干視^ニ吉^ニ吉^ニ述干視^ニ沙^ニ高干視^ニ級^ニ貴干視^ニ大奈麻^ニ選干視^ニ奈麻^ニ上干視^ニ大舍^ニ干視^ニ舍知^ニ一伐視^ニ吉次^ニ彼日視^ニ小鳥^ニ阿天祖^ニ先沮知^ニ(10)」という記録が三國史記に見えており「貴干」は新羅國の外位四等官、新羅國內の官位では十等官に相當する。これらの用例は何れも朝鮮資料にあった表記法のままを書紀編集時に利用したものと思われる。

用例(2)に「微叱己知波珍干岐」という記事が見える。「波珍干岐」は、天武十四年紀「新羅遣波珍食金智祥」の「波珍食」と同一語と考えられる。「波珍」は國史大系本の傍訓に見られるとおり「ハトリ」と訓むべきであろう⁽¹¹⁾。三國史記によれば「波珍食」は新羅國の第四

等官とされている。ところで「干岐」「食」の兩用字は同一語の、字面を異にした表記であるが、「食」が格式ある表記の文字として用いられている。「食」の漢字本来の字義は「食べもの・夕飯」の意であり、食足りることが秩序の確立、國家繁榮の基礎と考えられたゆえであらう。河野六郎氏によれば「食」は「ハンギ」と読み、「大なる食事」の意を表わすと同時に「大なる君」の意をも表わすとされている⁽¹²⁾。であれば漢字「干岐」の「干」は「大なる」を意味する語「ハン」の表記にあてられていると考えられる。

ところで「微叱己知」(微叱許智とも書く)は、新羅本紀に「王弟末斯欣自倭國逃還」(三國史記卷三・訥祇王二年)「末斯欣卒。贈舒弗郎」(同十七年)と記録されている「末斯欣」と同一人物と考えられている。三品彰英氏は「末斯欣の史傳は新羅の文獻によつて書紀撰者が採用したものに違いない⁽¹³⁾」との見解を示されたが、私見では結局、「微叱己知」の表記は朝鮮の古文獻に——たとえば「末斯欣」というような字面で——記録されていたのを、書紀編集時に正確に人名(の読み方)を伝えるため一字一音式音假名によつて書き直したものと推定した。「干岐」という表記も恐らく書紀編集者の誰かが、正確に「ハンギ」と讀ませるために用いた表記であろう。朝鮮の古記録には尊稱の意を表わす語の表記に漢字「干」のみの用法は多いが、「干岐」と表記した例は見られない⁽¹⁴⁾。

用例(4)に見える「伐旱」に、日本古典文學大系では「ほつかん」の付訓があり、頭注には「伐旱は新羅十七等官位の第一位たる角干にあてられる⁽¹⁵⁾」とある。末斯欣が歿後「舒弗郎」の稱を受けていることから「伐旱」は頭注のとおり新羅國第一等官であることをたしかめられ得る⁽¹⁶⁾。三品氏は「伐旱」の字面が三國史記、職官志に掲出されていない事をまず指摘され、語頭子音の發達の推移を論證された李

崇寧博士の學說を引きつつ「伐旱は古い形の干伐食を寫したものの⁽¹⁷⁾」と考えられた。ところで古い形を寫したという「伐旱」の表記が書紀に見えているのは、編者の中に朝鮮の事情に精通した人がいて資料の整理にあたったと考えられる。更に漢字「伐」が用いられているが、「伐」を「フル」の音假名として用いるのは朝鮮系の人達と推定されるので、書紀の編集には朝鮮系の人(歸化人?)の参加があつたものと想像される。

用例(3)の「宇流助富利智干」の「宇流」は新羅本紀に見える「干老」と同一人物と言われている。更に神功皇后攝政五年紀の「汗禮斯伐」とも同一人物かとの説⁽¹⁸⁾もあるが決定的なことは不明である。もし「干流」と「宇流」が同一人物であれば、「宇流」の表記は「干流(ㄱ)」を日本人の讀解の便を考え音假名によつて表記し直したものである。 「助富利智干」は新羅國一等官「舒弗郎・角干」の表記であるが、「助富利」という字面の表記は朝鮮の古文獻には全く見られない。一字一音式音假名によつて表記し直したものである。

用例(5)の「及伐干」は新羅國第九等官名、用例(6)の「大角干」は新羅國で特設された大官位名である⁽¹⁹⁾。何れも朝鮮の古文獻に見える表記であり、朝鮮資料に基づいての記録であると思われる。

用例(8)に見える「伊叱夫禮智干岐」は「智叱夫禮智奈末」とも呼ばれていた。「奈末」は三國史記によれば新羅第十一等の官名であることが知れる。であれば「伊叱夫禮智干岐」の「干岐」は尊稱を表わす接尾辭と考えられる。ところで三國史記には「異斯夫^{或云昔宗} 姓金氏奈勿王四世孫」との記録がある。書記の「伊叱」は現代朝鮮語「苔(이끼)」につながる古語(이끼)を⁽²⁰⁾、「夫禮」は朝鮮語の「宗」を字畫の少い

音假名で記録したものと考えられる。漢字「叱」が音假名として日本語表記に使用された例は日本の上代文獻には見當らないのに対して、朝鮮の古文獻には音假名としての使用例が多数見られる²¹⁾ことから、「伊叱夫禮干岐」の表記は朝鮮系の人の手によって表記されたと考えられる。

用例(9)、「次旱岐」・「下旱岐」は任那國の同一官職名の異稱であろうと言われているが詳細は不明である。

用例(1)、「(5)」、「(6)」、「(7)」、「(9)」、「(10)」、「(11)」、「(12)」、「(13)」、「(14)」、「(16)」、「(17)」、「(18)」、「(19)」、「(20)」、「(21)」、「(22)」、「(24)」に見える「旱岐」(例文によつては「干岐」)の二十九例は、任那國を構成している諸連合國の王の尊稱である。任那國は同種族の連合から成り立っていることは欽明二十三年紀の「總言任那」、別言「加羅國・安羅國・斯岐國・多羅國・卒麻國・古婁國・子他國・散半下國・乞浪國・稔禮國・合十國」によつて知られるが、それらの國の王の尊稱、官職名も或る程度共通していたものと思われる。ところで尊稱を表わす語に異つた二様の表記「干岐」「旱岐」が見られる。「旱」は韻鏡によると「外轉第二十三開、喉音、濁、一等音」であり、頭子音は「カ行濁音」で「ガン」に近い發音とされ、さきに推定した「干」の音價「ガン」と大體に於いて相通している。朝鮮の文獻には「旱」の文字を用いて官位名・尊稱の接尾辭を表記した例は見出せない。書紀編集時に日本の文獻用に音假名表記に書き直したものかと思われる。

三

梁柱東氏は「多義字訓讀」近訓「만호」이나古訓「하」하의原形「하」임은 既注이말이 上代以來「多・大」의兩義에通用되엇음은羅代의最高官名「角干」(갈간)을一云「酒多(수불한)」라

함으로써 알만하다(22)」「麻立干은中國史書엔「樓寒」으로記載되었 있다。新羅、秦書曰符堅建元十八年、新羅國王樓寒遣使衛頭獻美女(太平御覽卷七八一四夷部二・東夷(22)と述べられ、「干」は朝鮮語「한(大・多)」の表記であること、「寒」と音相通することを指摘しておられる。

ところで「大」の意を表わす現代朝鮮語は「한」(ハン)と發言されるが、「한」の「ㅎ」は英語「h」、一般には現代日本語の「ハ」に近いと言われている。しかし徐泳熙氏²³⁾、梁聖大氏²⁴⁾によれば「ㅎ」は本來、のどの奥で發音される音で、現在でも日本語の「ハ」よりもっと奥の方で發音されることが多い」とのことであった。

中世朝鮮語では龍飛御天歌に「한소로두소내자시며(25)」とあり、「大」の意を「한」で書き表わしていることが知れる。訓民正音によれば「ㅎ」は喉音이니如虛字初發聲이니。並書호를如洪字初發聲이니라(26)とあり、漢字「虛」の頭子音の如きものとされている。韻鏡によると「虛」は「内轉第十一開、喉音、清三等」、字母は「曉」である。藤堂明保氏は「曉」の頭子音を「無聲のマサツ喉音(27)」と推定されているが、氏の成果に従いつつ中世朝鮮語の「ㅎ」の音價を推定すれば結局「無聲マサツ喉音」の如きものと考えることが出来るであろう。訓民正音には見慣れない朝鮮文字「하」の使用がみえいているが、單なる呼氣の「ㅎ」ではなく「하」よりもやゝのどを強く摩擦する様子を「하」²⁸⁾と文字化したものであろう。

古代朝鮮語の「大」を意味する語の表記法について、金澤庄三郎氏は「新羅の地名に韓多沙郡と小多沙郡とが相對してある(三國史記卷三四)からこの韓は大の意でなければならぬ。日本書紀に見えてゐる新羅の官名韓阿浪・韓奈末(天武二年紀)は、三國史記卷三八の大阿浪・大奈末に當る²⁹⁾と述べられ、「韓」は「大」を意味する語表記の文字と考えておられる。河野六郎氏が「干岐」「旱岐」を「大いなる君」の意とされたこと、梁柱東氏が「干」を「大・多」の意とされ

たことなどは既に述べてきたとおりであるが、諸氏⁽²⁹⁾の意見を参照しつつ、「大」の意味をもつ古代朝鮮語の語表記に用いられた漢字を調査するに、「干・早・漢・韓・寒・翰・邯・判⁽³⁰⁾」などが見出される。ところで韻鏡によると

「漢」は外轉第二十三開、喉音、清、一等で頭子音は「x⁽³¹⁾」(無聲摩擦喉音)と言えらる。

「早・寒・翰・韓・邯⁽³²⁾」は「外轉第二十三開、喉音、濁、一等」で頭子音は「g⁽³¹⁾」(有聲摩擦音)である。

この資料及び現代・中世朝鮮語の頭子音を基にして判断してみると、「大」の意味を表わす古代朝鮮語の頭子音は「有聲摩擦喉音」の傾向を示していると言えよう。「大」の意を表わす朝鮮語「한」の頭子音の變化を概略してみると「有聲摩擦喉音」「無聲摩擦喉音」「聲門摩擦無聲音」(無聲摩擦喉音)とたどることが出来るであろう。

ある語の表記に、或る一定の音假名を當てる習慣が確立していなかった時代では、頭子音に有聲摩擦音をもつ語(ghan⁽³³⁾)を表記するに、或る時は有聲摩擦喉音の「早」の漢字で、或る時は有聲軟口蓋音の「干」の漢字でと、數種の漢字を用いて表記したのは、當時としては止むを得ぬ方法であつたろう。

四

日本書紀に音假名として用いられた「干」「早」五十例は、すべて朝鮮に關係ある語彙の表記ばかりであつたが、それらは朝鮮人(もしくは朝鮮系の人)によって筆録されたもの、或いは朝鮮人によって記録されていたものを利用して書寫筆録したものと推定された。日本書紀以外の日本上代文獻には、萬葉集に二例⁽³⁴⁾、新撰姓氏錄に二例⁽³⁵⁾「干」が音假名として使用されているのみで他には見られない⁽³⁶⁾。一方「大」の古朝鮮語(ghan)を寫すには適切な文字であつたため朝鮮

の古文獻には音假名としての「干」の使用は多い⁽³⁷⁾。朝鮮人(もしくは朝鮮系の人)には慣れ親しんだ文字であるとも言える。これに反して日本語の「カ行・ガ行・ハ行」を寫すには「干」「早」は必ずしも適當な音假名であるとは言えず、當時の日本人には、はなはだ不慣れた音假名であつたに違いない。上代日本文獻に音假名としての使用が極めて少いのもそのためであろう。つまり日本人の音假名の大系の主流からは、離れた存在であると言えよう。一方朝鮮關係資料では使用される頻度の多い點を考慮の上「朝鮮系の音假名」と推定したのである。日本書紀の付訓には、音假名「干」「早」に「カン」と付せられているが、「ハ行」が室町・江戸初期まで唇音系であつた日本語では、古代朝鮮語の「大」(有聲摩擦喉音・/ghan/)は「カ行音」としてしか取り扱ひようがなかったためと思われる。

注

- (1) 拙稿(1) 日本書紀の音假名「支」 語文研究二四號 (九州大學・國語國文學會)
- 拙稿(2) 上代日本文獻に見える漢字「叱」について 福田良輔教授退官記念論文集
- 拙稿(3) 日本書紀に見える朝鮮系音假名 西山學報十九號(西山短期大學)
- (2) 日本古典文學大系 日本書紀下 八〇頁
- (3) 國史大系本・日本古典全書・日本書紀通釋では顯宗三年紀の本文を「用任那左魯那奇。他甲肖等計」。殺百濟適莫爾解於爾林。「百濟國殺佐魯那奇。他甲肖三百餘人」と讀解して「那奇他」なる人物の存在を認めていない。
- (4) 國史大系の底本には「那歌陀」とあつたのを鈴鹿氏所藏中臣連重本によって「哥」に改めた旨の注が見える。
- (5) 日本古典文學大系 日本書紀下 七六頁
- (6) 百濟官有十六品、佐平五人一品、達率三十人二品、思率三品、德率四品、扞率五品、奈率六品、將德七品、施德八品、固德九品、李德

- 十品、對德十一品、文督十二品、武督十三品、佐軍十四品、振武十五品、克虞十六品、(三國史記 學東叢書版三六一頁)
- (7) 馬淵和夫氏は「未定稿」第十號「古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の研究」で「汶休帶山」を「汶休帶」という山の名と考えられて「新羅の音韻組織」の項に入れて語の分析を試みておられるが、「固德」と百濟の官位名が付せられていることから推して百濟人名と考える方が正しいであろう。
- (8) 日本古典文學大系 日本書紀下 九六頁
- (9) 馬淵氏は「碩干」「富干」の「干」を「于」とされておられる(注(7)の論文)が「富干」には寫本間に異同が見られず「于」におきかえる必要はない。「碩干」は國史大系の底本となつた寛文九年の刊本には「于」となつていたのを京都北野神社所藏兼永本、鈴鹿氏所藏中臣連重本によつて「干」に改められた注が見える。「干」が正しいものと思われる。
- (10) 三國史記(學東叢書本) 三六〇頁
- (11) 「波珍」を馬淵氏は「pa-tien」と讀解されたが、「ハトリ」と讀むべきことは前田恭作氏、河野六郎氏はじめ諸家認めるところである。國史大系本の付訓「ハトリ」は正當な訓みが傳つているものと解することが出来る。
- (12) 世界言語概説下、四二九頁 研究社刊
- (13) 三品彰英 日本書紀朝鮮關係記事考證上卷 十一頁
- (14) 日本書紀の中で「干岐」と表記せず「干」のみのみ見られる。用例(3)「宇流助富利智干」(2)「久禮叱及伐干」がそれである。
- (15) 日本古典文學大系 日本書紀上、三五〇頁
- (16) 新羅國の官位は十七等あり、一、伊伐浪、二、伊尺浪、三、逕浪、四、波珍浪、五、大阿浪、六、阿浪、七、一吉浪、八、沙浪、九、級伐浪、十、大奈麻、十一、奈麻、十二、大舍、十三、舍知、十四、吉士、十五、大鳥、十六、小鳥、十七、造位である(三國史記)
- (17) 三品彰英 前出書 八三頁
- (18) 日本古典文學大系では、「汗禮斯伐」について「攝政前紀仲哀九年十二月條一書に新羅王の名とされる宇流助富利(智干)と同名か。宇流汗禮、助富利斯伐」とある。三四九頁
- (19) 「大角干或云大舒發翰 太宗王七年減百濟論功授大將軍金庚信大角干於前七位之上加之非常位也」(三國史記卷三十八、雜志七)
- (20) 昔は、現代朝鮮語이끼(日韓辭典・徵文社・서울特別市)であるが、姜義永編の「日鮮新玉編」では「이끼」である。古代語は「異斯」と表記されているが「斯」は子音「S」の表記であらうと思われる。이끼이끼이끼の變化が考えられるであらう。
- (21) 拙稿 前注論文の(2)
- (22) 梁 柱東 朝鮮古歌研究 七三四頁
- (23) 韓國人 現在京都市下京区東御靈町在
- (24) 韓國人 // 京都市左京区淨土寺眞如町在
- (25) 前田恭作 龍歌故語箋(東洋文庫)による。
- (26) 九州大學文學部言語學研究室藏、寫眞版
- (27) 藤堂明保 中國音韻論 一六一頁
- (28) 金澤庄三郎 日鮮同祖論 一二三頁
- (29) 小倉進平氏は名著「郷歌及吏讀の研究」(四五六頁)で「干」が「人」の意になる場合をも指摘され、「處干は處と讀み、小作人の義である。農夫を農夫干(音旱)などという如く干を人の義に用いることがある」と述べておられる。
- (30) 「韓・邯・判」は「浪(大いなる君)」との關連を考えた上、資料に加える。
- 「判」は韻鏡によると「外轉二十四合、唇音、次清、一等」で頭子音は「p」になる。例外として扱つておく。
- (31) 福永靜哉 「韻鏡新釋」による發音表記
- (32) 「韓・邯」は韻鏡には見えない。廣韻には、「韓・河干切、邯・河干切、寒・河干切、翰・河干切」とあつて同韻とみなし一括した。
- (33) 福永式表記をとれば當然「g」となるであらうが、煩雜さを避けてローマ字式表記を試みた。
- (34) 「干各人雖云」(7・二二九八)、「湯按干妹必乘來鴨」(12・三一七四)が音假名としての使用と言われる。「草社者取而飼旱水社者挹而飼旱」(13・三三三七)に「旱」の使用が見えるが、伊藤博氏の「矣」の誤字説が妥當とされている。
- (35) 新撰姓氏錄、河内諸蕃 伏丸 新羅人燕怒利尺干之後也、「尺干」

は新羅の官名と考えられる。未定雑姓、三問名公彌麻奈國主牟留智王之後者、不見、崇押天皇御世、額有角人來船于越國寄飯浦遣人間日何國人也對日意富加羅國王子、名都怒我阿羅斯等阿利叱智干岐、傳聞日本國有聖歸化

(36) 隅田八幡神社所藏、人物畫象鏡銘文に「癸未八月日十大王年口弟王在意柴沙加宮時斯麻念長奉遣開中費穢人今州利二人等所白上同二百旱所此竟」とあり「旱」の文字が見える。歸化人(朝鮮系)の手になつた銘文で音假名の例に加え、「旱」は「衡の單位・貫」の説も見えるが、「挺」の意とする説が有力である。

推古朝遣文釈迦佛造記に「法興元卅一年歲次辛巳十二月鬼前太后崩明年正月廿二日上宮法皇枕病弗念干食王后仍以勞疾竝著於床」とあるが、法皇帝説によつて「弗念干食」の誤りと考え、「常に食をとらなかつた」の意と考えるべきであろう。

(37) 靈巖西院鐘記

昭大王當縣聰規沙干
峻豐四年癸亥九月十八日 古彌縣

その他、金石文には、昌寧碑(新羅眞興王二十二年)に三十二例、黃草嶺碑(新羅眞興王二十九年)に四例、北漢碑(眞興王巡狩碑)四例、官名表記に用いられている。

(日本文學科 助教授)

On-Gana of Korean Origin found in *Nihonshoki*

—On the Usage of Chinese Characters, ‘旱’ and ‘干’—

Shigetoshi Fujii

Summary

A certain On-Gana found in the ancient Japanese documents may be derived from Korean Language.

In order to prove the hypothesis, I have tried to examine some chinese characters and, as a result, I am assured that Chinese Characters, ‘叱’ ‘伐’ and ‘支’ used as On-Gana (seen in *Nihonshoki*), are derived from Korean Language. In this paper, I intend to examine the Chinese Characters, ‘干’ and ‘旱’ through the ancient Japanese documents, and explain the usage of them as On-Gana.

(Assistant Professor, Department of the Japanese Literature)